英語「强勢」の研究

上阪泰次

本稿は筆者未刊の原稿「英語の音韻と其發達」中第三章「音の連結と變化」の一部であつて、前に「音の同化」があり後に「文の强勢」が續いてゐる。教場英語の補足として幾分にても參考になれば幸である。

（1）「音　　節」

音は其の性質又は幾分かは其息の力及び長さによつて音の響く又届く距離が違ふのである。此音の明朗さをsonority（きこえ）といふのであるが、此 sonority は息の力及び長さの差等のない限り、母音は父音よりも一層大きく、廣母音は狹母音よりも大きく、有聲父音は無聲父音よりも大きく、そして有聲滑父音は他の如何なる有聲父音よりも大きく響くのである。そして此小さい音大きい音が互に相混つて我々の言葉となるが、その内大きい音は小さい音を引つけ、太い音は細い音と相結合して、之を明朗にならしめる。

【註】 Kruisinga では sonority は音の articulation のみに依るのでなく、stre·s. strength にもよるといふ（p. 47）。そしてかゝる特別の事情のない限り音を sonority の度合によつて次の通り六通りに分ける。1. 普通の Consonants　2. Nasals

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

3. Side-consonants 4. Trilled r 5. High Vowels, ([i] [u] の如き) 6. Low Vowels ([a] [ɔ] の如き)。

1. の父音の内でも、[s] [ʃ] 等の hissing sounds の方が[p] [t] [k] 等の plosive よりも「きこえ」は大である。その内の sonority の順序を示すと a 無聲破裂音 b 無聲摩擦音 c 有聲破裂音 d 有聲摩擦音といふ風に大きくなる。Jones は sonority は音の箇有の性質 (tamber) に依るとし、それに對して、長さ、力、高さ、性質の結合による音のきこえを prominence と稱してゐる。即ち length, stress, intonation が變らなければ、廣母音は狹母音よりも大概 prominence が大いといふ。しかし性質上 sonorous な音でも長さ、力が減ずると prominence が少くなるといふ風に sonority といふ語を狹い意味に用ひてゐる。

かくの如くして、母音はそれ自身最もきこえの大きなものであるのみならず、他のきこえのより小い音を前後に引つれて助け行く性質を持つて居るが、此様にある强い太い音と弱い細い音とからなつてゐる一塊の音を音節 syllable といふのである。音節を形成する中心のきこえの太い音は大抵母音である。父音の内でも最も sonorous な [l] [m] [n] [r] は又成節音 (syllabic sound) であつて、例へば people ['pi:pl] とある時、初めの母音 [i:] は語頭の [p] と結んで ※[pi:] なる一音節をなすが、[l] は又後の [p] を引つけて [pl] なる第二音節を形成するのである。此成節父音 (syllabic consonants) [l] [m] [n] [r] には必要な場合には其成節音である印として [l̩] [m̩] [n̩] [r̩] の様に下に [̩] 印を附するが、これは後に母音が來る場合を除いては混同する恐れはないから其必要を見ぬ。即ち written [ritn], reason [ri:zn], prism [prizm] は二音節の語で其[n] [m] は成節音としか讀めぬから、態々 [n̩] [m̩] と記す必要はない。しかし gluttony は當り前は ['glʌtəni] と三音

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

節に讀むべきものであるから、之を〔glʌtni〕と書く場合、〔n〕が成節音であつて三音節の語である以上、Chutnee〔'tʃʌtni〕とは韻を踏めない語である。その爲めには是非とも之を〔'glʌtni〕とせなければならない。

※かく母音で終る syllable を open syllable 開音節、父音で終る者を close syllable 閉音節といふのである。

【註】Syllable といふのは Greek の語源をさぐると syn=with, labein=take となつてゐる。即ち take together で一攫みに云へる一連の音である。Syllable には是非とも (1) 母音がなければならぬ。しかし (2) 母音は重母音でない限り一個以上あつてはならぬ。(3) 父音の有無又は多少には關係はない。a, stand, health, &c.

成節父音の作る音節は accent を取ることはない。又此父音が成節父音になり得るためには其前に母音の來ない事に注意せねばならぬ。Wall〔wo:l〕, pearl〔pə:l〕等は單音節、apple〔'æpl〕, reason〔ri:zn〕ridden, prism, centre, 等は二音節である。children をなまつて〔i〕を拔して〔tʃildrən〕といひ、milk を〔mlk〕といふ時は〔l〕が〔i〕の代理に成節音になつてゐるのである。

以上の例を見てもわかる様に成節音は普通父音によつて別たれて居る。しかし二音節間が父音によつて隔てられてゐない場合例へば create〔kri(:)'eit〕等の様に母音が直接に續く場合には、其間に氣息の勢が少し減ずるか或は極微かな父音又は父音的母音が間に挾まつて別音節を知らせるのである。

create〔kri(:)' 'eit〕
gnawer〔nɔ:ə〕

さて此時中間に父音も聞えず又息の勢も減ぜない時は二母音共に一音節に屬するもので、之を diphthong

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(di=dis, twice〔Greek〕, phthoggos=voice) 二重母音といふ。けれども一音節は一母音が原則である。それでは二重母音は二つの母音を持ち乍ら何故に別音節を作らぬのか。それは sonority の上から初音のきこえが大で後音は小さい、いはゞ母音と父音とのやうな關係に立つのであつて、後者はこのために Consonantal Vowel (Sweet: Primer of Phonetics; § 153) といはれるやうな關係にあるからである。この場合前者を Syllabic element といひ、後者を Non-syllabic element といふ。即ち前音のきこえが後音のよりもずつと大きい譯で、かゝる二重母音を※falling diphthong 下向二重母音 (Kruisinga § 164—166) といふ。しかし二重音の中には〔iə〕〔uə〕のやうに初音が高母音で、きこえが後音〔ə〕よりも小さいものがあるが、それは〔i〕〔u〕に息の力を込めて發音するため、兩者の上にきこえの大小が轉換されて矢張下向となる譯である。若しこの場合〔i〕をよい位に強め、前後兩音のきこえが同等位になると、兩方相獨立して、二音節を形成することになる。即ち 'ni'(j)ə のやうになるが、この際更に〔i〕が一層弱くなり、〔ə〕が一層強くなると〔i〕と〔ə〕の成節能力が逆轉して〔njə〕〔niə:〕のやうな所謂 rising diphthong 上向二重母音になるのである。(尙この種のものには半母音を用ひた yes, yard, will, what 等の例がある。) かくの如く〔iə〕のやうな成節音たるべき初音が非成節音たる後音よりもきこえの大でない二重母音は、うつかりすると二音節になりさうな處から、不確實二重母音といはれ、又かゝる二重母音は一般に所謂 murmur vowel なる〔ə〕で終るから murmur-diphthong とも云はれてゐる。更に下向二重母音全體について考へて見る時、〔ai〕〔au〕〔ɔi〕の如く前後兩音が全く違つた、明瞭に區別さるべき音であ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

る場合は之を完全二重母音 full diphthong と云ひ〔ei〕〔ou〕の如く前後兩者の舌の位置が近く、音色の差が極めて僅少である場合には之を half diphthong 半二重母音といふ。後の場合に於ては二重母音としての性質が極めて間違へられ易く、Kruisinga によれば〔ou〕（no 等の）は前後音の舌の位置は同じ位置で、〔u〕を云ふためには一寸唇を前よりも圓める位のものである。隨つてやゝもすれば、〔ou〕は〔o:〕に〔ei〕は〔e:〕になり易いことは我々の常に經驗する所で、本國でも蘇格蘭人、又は米國人邊りの發音の癖である。

※Sweet によれば after-glide diphthong. 之に對して rising diphthong は fore-glide diphthong

triphthong〔三重母音〕は二重母音に更にもう一音加はつたものであるが、矢張一音節を成さなければならない。そこで、本當の三重母音であるためには、其三音の間が父音に近い音、又は弱い息の勢等で斷切られる事なく、しかも第二音が前後の音よりも低母音、即ち口の開く音である事が必要になつて來る。即ち why を不注意に發音した時に聞える〔oae〕といふ音等は※其好例である。それから見れば、〔aiə〕〔aue〕の例は何れも第二音が第一第三音より口の開く、「きこゑ」の大きい音だとは云へない。そのために第一、第三音は間を斷切られ、二音節の音になつて了ふ。そこでこれを眞の三重音にするには中の〔i〕〔u〕を〔a〕〔ə〕と同等以上に響の大きい低母音にする必要がある。〔i〕が〔ε〕に變ると、大分本當の三重音らしくはなるが、まだ本物ではない。遂に極端になつて〔aiə〕が〔aə〕の二重音に約まり、も一つ進んで〔a:〕となつて了ふ。これが fire〔faie〕が俗語〔fa:〕になる經路で、餘程の變化といはねばならぬが、勿論これは眞似るべき音ではない。しかしこれは、日常

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

特に弱音節に起る現象で、irate〔aiə'reit<a:'reit〕our own〔auə'roun<a:'roun〕のやうになる。〔aiə〕〔auə〕が眞の三重音であり得ない事は以上で明瞭になつたが、しかし詩等にはよく一音節として取扱つてあるから之を便宜上三重音一音節として取扱つて置いて差支はないと思ふ（Jones）。

※〔weiv〕,〔wouk〕.〔jouk〕,〔jeil〕, &c. (Kruisinga)

（2）「強　　勢」

先に擧げた people〔'pi:pl〕について考へて見る時、これは〔pi:〕と〔pl〕の二音節で出來て居る事は已に說いた。しかし之を發音する時〔pi:〕の方が〔pl〕よりも強く發音されるのに氣がつくだらう。この樣に音節を發音する時に、それに附する息の勢即ち stress が強いのを强勢、勢の弱いのを弱勢といふのである。此音の stress の强弱は音節によつて一々違ふ譯で、例へば advisability（3 2 6 1 5 4）を發音する時、語の上に附した番號順の如くに各音節に强さの差等を附ける事が出來る。けれども實用上にはかゝる正確さは必要でない。普通は强勢弱勢の二つで間に合はせて居る位で、三種類も區別して置けば澤山で又その方が便利である。

1. strong stress (or primary stress)（强勢）〔'〕
2. medium (or half strong) stress (or secondary stress)（半强勢）〔、〕
3. weak stress（弱勢）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

【注意】 これ等の符號は萬國發音學協會の規程では syllable の初めに附するので本稿でも是によつておる。

opportumity 〔ˌɔpəˈtjuːniti〕

transubstantia ion 〔ˈtrænsəbˌstænʃiˈeiʃ (ə) n〕.

Webster 式では ŏp″pŏrtū′nity といふ風に syllable の後に符號が附してあり半强勢には ″ を用ひて居る事又 Concise Oxford Dictionary では opportu・nity といふ風に母音の直後に・を附してある事に注意せねばならぬ。

是によつて一語中强勢のある音節を strong syllable 强音節、半强勢のある音節を half-strong syllable 半强音節、弱勢のある音節を weak or unstressed syllable 弱音節と呼んである。しかし音の强弱は上の如くに「語の强勢」the stress of a word or word stress の外に the stress of a syllable「音節の强勢」といふものがある。即ち一音節中に一母音以上が存在してゐる時も、矢張强勢と弱勢の區別がある譯である。そして此時二母音の內初音に强勢があれば此二母音は〔>〕descending (or fore-stress)「前强勢」だといひ、第二音に强勢があれば〔<〕ascending (or end-stress)「後强勢」、兩音に平等の强勢がある時は〔=〕level stress「均勢」だといふのである。しかし英語の二重母音に於ては一般に falling「前强勢」で强勢が初めにあると知らねばならぬ。〔ai〕は即〔$\overset{>}{\text{ai}}$〕であつて〔$\overset{<}{\text{ai}}$〕ではない。

此傾向は「語の强勢」にも通じるのであつて、英語では「語の强勢」も矢張り decending「前强」が普通であ

る。强勢は意味上最も重要な音節に置かれる譯で、其主要なる音節といふのは大概語の初めに來る樣になつて居るからである。'fearless, 'fisher &c. 更に進んで强勢には「文の强勢」the stress of the sentence, 或は一層「强調」(emphasis) といふものがある。これは文中の最も重要な部分に附せられるので、文章の意味と大關係を持つものである。

What shall we do ? 〔'wɔtʃəlwi : 'du:〕

(3) 「語の强勢」

word stress は前にも述べた樣に一語中の强勢であつて多音節語中何れかの音節を他の音節よりも强く發音することを云ふのである。大概一定したもので辭書中にも載つておる所謂 accent 嚴密にいへば stress accent である。英語の accent は非常に難しい。英語は單純な言語ではない。純英語の外に羅典、希臘、佛蘭西、伊太利其他の外來語が這入つて居る丈それ丈 accent も多樣だと思はねばならぬ。それが又同じ語でも意味によつて違ふ。同じ意味でも人によつて違ふと來ては其複雜さ想像以上である。

例へば contend といふ語は「滿足」といふ意味の時は「kən'tent」であるが「在中物」の意味になると又「'kɔn-tənt」とも發音出來それが複數に用ゐられる時は殊に後の方の發音が多い。又 centenary といふ語は之を「sen'ti : nəri」と普通よむかと思ふと、同じ標準英語でもある人は「'sentinəri」「sen'tenəri」とよむ人もある。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

「ˈkɔstju:m, kɔsˈtju:m」「ˈædept, əˈdept」

「ˈkɔnsəlz, ˈkɔnˈsəlz, kənˈsəlz」と列べ來るとaccent等は出鱈目で、どういつてもよい樣な感じさへ起るが、實はそれ程複雜なのである。隨つて此accentを習得する方法は只注意深い記憶と練習に俟つより外ないが、學者(主としてJespersen)の研究によつて强勢の所在を決定する一般原則がないでもない。以下其れについて少しく研究して見よう。

A (意味の上からの强勢) Value-stress

a 前强勢 (fore-stress)

先に述べた樣に强勢は言葉の重要な部分に置かれるので重要でない部分は隨つて弱勢に發音せられるのである。然も純英語の語では主なる意味は一般第一音節にあつて其後に續く音節は第一音節の意味を修飾するため附屬的に加※へたものである。故に大抵の英語の語は(それの品詞にかゝはらず)第一音節に强勢があると見てよろしい。例へばdaily(名詞、形容詞、副詞)〔ˈdeili〕, ˈbaker〔ˈbeikə〕, ˈwisdom(名詞)〔ˈwizdəm〕, ˈfriendship(名詞)〔ˈfrendʃip〕, ˈanswer(名詞、動詞)〔ˈa:nsə〕, ˈwitness(名詞、動詞)〔ˈwitnis〕, ˈempty(形究詞、動詞)〔ˈempti〕, ˈnarrow(名、形、動詞)〔ˈnærou〕, &c. 又多くの合成語も同樣に考へてよい。ˈgodson〔ˈgɔdsʌn〕, ˌholiday〔ˈhɔlədi〕, ˈpostman〔ˈpous(t)mən〕&c.

〔註〕※純英接尾辭例

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

-er, -ar, -or (doer, liar, sailor), -ard (drunkard), -dom (kingdom,) -hood (manhood), -ness (goodness), -ship, -scape (worship, landscape), -en, -on (maiden, wagon), -ling (darling), -kin (napkin), -ed (gifted), -est (boldest), -ing (going), -ful (fearful), -ish (girlish), -ly (godly), -like (godlike), -less (hopeless), -some (handsome), -ward (downward), -teen, -ty ('thir'teen, -ty), -fold (twofold), -ern (eastern), -wise (otherwise), -way (always), -om, -m (blossom, seam), -ie, -y (baby), &c.

以上下線を施したのは次にあげる佛、羅系接尾辭例中の下線のものと共に其接尾辭を二以上重ねて用ひられる場合にも意味上附せられたアクセントの位置は變化しない。例へば im'provableness, 'beautifully, 'lovingly, &c,

又チユートン系ならざる語でも多の※語は第一音節の意味が重要である所から、純英語からの類推法で（英語化されて）强勢が前に移る。

'cousin〔'kʌzn〕, 'mountain〔'mauntin〕 'mason〔'meisn〕, 'logic〔'lɔdʒik〕, 'unity〔'ju:niti〕, 'finish（動詞、名詞）〔'finiʃ〕, 'danger〔'dein(d)ʒə〕, 'bargain（動詞、名詞）〔'ba:gin〕, 'error（動詞、名詞）〔'erə〕, honour（動詞、名詞）〔'ɔnə〕, censure（動詞、名詞）〔'senʃə〕, exile（動詞、名詞）〔'eksail〕, country〔'kʌntri〕, second(名、形、動詞)〔'sek(ə)nd〕. rescue（動、名詞）〔'reskju〕, duchess〔'dʌtʃis〕, mandate（名詞、動詞）〔'mændeit〕, creature〔'kri:tʃə〕, &c.

【註】※佛蘭西、羅典系接尾辭例

-ain, -en, -an(citizen), -ary, -ar(secretary, vicar), -our, -eur, -or, -er(amateur, doctor, robber), -ess, -ise (poetess,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

exercise), -ive, -iff (captive, plaintiff), -ant (merchant), -age (homage), -ance, -ence (penance, absence), -es (riches), -tion (nation), -son, -som (poison, ransom), -sion (mansion), -ment (pavement), -ry(poetry), -tude (longitude), -ure (measure), -y (study), -ity, -ty (unity), -al (trial), -acy (privacy), -ule (globule), -icle (article), -et (pocket), -ot (baggot), -ate (private), -ble, -able (readable), -ory (cursory), -ic (public), -ish (finish), -fy (deify), -it (credit), &c.

希臘系接尾辭例

-ot [zealot], -ist, -ost (dentist), -ic, -ics (logic), -ism (theism), -asm (chasm), -sis (basis), -sy(palsy), -ise, -ize (franchise), &c.

【注意】 注意すべき前强勢の語。

'effort, 'aspect, 'purchase, 'second (L. sĕcundus). 'empire, 'surplice, 'always, 'rescue, 'rescript, 'purport, 'chagrin [or—'—], 'divers 'massage (by Jones), 'saline (adj.) ['seilain] 'therefore.

b. 後强勢 (end-stress)

1. accent は元來重要な音節に附くのであるから to-'day の如き〔前置詞＋名詞〕合成副詞や be'gin, for'get, mis'take, un'tie, with'draw の如き或弱勢の※接頭辭で始つた語では（a. の場合と反對に）accent は第一音節に落ちずして所謂此等の語の stem に落ちる事勿論である。そして此種の語の大多數は動詞である。

2. 又佛蘭西系羅典系の語中特別な原因があつて强勢の移動したものでない限り、殊に此チユートン系の後强

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

勢の語に似てゐる語は本來の强勢を維持して後强勢を保存してゐる。

a—(a'void, avert), ab—(ab'sorb), ac—(ac'cept), ad—(ad'dress), af—(af'firm), al—(al'low), ap—(ap'pear), as—(as'sure), con—(con'tain), com—(com'pose), de—(de'cide), dis—(dis'pute), e—(e'lude), en—(en'joy), in—(in'clude), em—(em'brace), im—(im'press), ex—(ex'clude), ob—(ob'tain), op—(op'pose), per—(per'force), pre—(pre'dict), pro—(pro'pose), re—(re'turn), se—(se'cure), sub—(sub'side), sup—(sup'pose), sus—(sus'tain), trans—(trans'act) 等の prefix を有せる語がそれである。

【註】純英接頭辭例

a-(a'be!), al-(a'lone), at-(a'tone), be-(be'fit), for-(for'sake), fore-(fore'tell), gain-(gain'say), in-(in'qnire), mis-(mis'lead), out-(out'brave), to-(to'gether), up-(up'hold). with-(with'draw), &c. (接頭語に强勢の來るのは不定强勢を參照せよ)

(比較)　純英語系　a'rise,　e'nough　in'deed, &c.

　　羅佛系　af'fair,　e'state,　in'sist, &c.

3. antic 〔'æntik〕, (=grotesque,) に對して antique 〔æn'ti:k〕, (=belonging to antiquity,) となつてゐるのは後者が近頃佛語から借りいれたからだと思へる。これと同樣の差違は次の語にも見出される。

'human 〔'hju:mən〕　hu'mane 〔hju(:)'mein〕;

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

'urban〔'ə:bən〕,　　ur'bane〔ə:'bein〕,

'divers〔'daivəz〕,　　di'verse〔dai'və:s〕,

かくの如く、次の羅典又は佛語接尾語を有する語は其接尾語に强勢が來る。

—aire : million'aire, doctri'naire, &c.

—ee, —een : refu'gee, devo'tee, trus'tee, guaran'tee, assig'nee, ca'reen, tu'reen, &c.

（例外　'yankee, 'pharisee, com'mittee, 'matinee〔'mætinei〕, 'engine.

—eer, —ier : ca'reer, auctio'neer, domi'neer, engi'neer, ˌgazet'teer. ca'shier, ˌbriga'dier, ˌcava'lier, ˌfinan'cier, ˌgrena'dier, &c.

—oo, —oon : bal'loon, har'poon, panta'loon, ba'boon, co'coon, dra'goon, fes'toon, mon'soon, bam'boo, ta'boo, ta'too, hal'loo, &c.（例外 'cuckoo）

—ette〔et〕, —esque〔esk〕: ga'zette, co'quette, ˌciga'rette, gro'tesque, picturesque, &c.

—ique〔i:k〕, —igue〔i:g〕: pique, an'tique, ob'lique, u'nique, phy'sique, pra'tique, fa'tigue, in'trigue, &c.

—ose, —ese : o'cose ver'bose mo'rose, Chi'nese, ˌJapa'nese. &e.

（例外　'grandiose, 'purpose, 'bellicose.）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

其他 machine〔mə'ʃi:n〕, routine〔ru:'ti:n〕, ma'rine, maga'zine, cuisine〔kwi'zi:n〕, fascine〔fæ'si:n〕, 等 —ine〔i:n〕を有するもの又は brigade〔bri'geid〕, cascade〔kæs'keid〕, cavalcade〔ˌkæv(ə)l'keid〕, colonnade〔ˌkɔlə'neid〕, crusade〔kru:'seid〕, brigade〔bri'geid〕, parade〔pə'reid〕 promenade〔ˌprɔmi'na:d〕, lemonade〔ˌlemə'neid〕, serenade〔ˌseri'neid〕, (例外 comrade〔'kɔmrid〕), 等—ade を有するものがある。

【注意】 その他特に注意すべき後强勢の語をあげる。

ca'bal, ca'nal; se'dan, e'vent; pre'fer, oc'cur; ci'gar, ba'zaar, gui'tar; pe'tard; cui'rass〔kwi'ræs〕, mo'rass; se'rene〔si'ri:n〕, ob'scene, ter'rene, gan'grene; au'stere, se'vere, sin'cere; ca'ress〔kə'res〕, suc'cess; sur'prise, ca'price〔kə'pri:s〕, po'lice, valise〔və'li:z〕; pa'role, pa'trole, ca'jole, pis'tole ma'ture〔mə'tjuə〕, ma'nure; ba:stille〔bæs'ti:l〕, ca'noe〔kə'nu:〕, ca'tarrh〔kə'ta:〕, cham'pagne〔ʃæm'pein〕(but champaign〔'tʃæmpein〕), fi'nesse〔fi'nes〕, gen'teel〔dʒen'ti:l〕, gi'raffe〔dʒi'ra:f〕, ha'rangue〔hə'ræŋ〕, ho'tel〔hou'tel〕, ma'ligne〔mə'lain〕, mous'tache〔məs'ta:ʃ〕, na'ïve〔nai'i:v〕, o'paque〔ou'peik〕, ro'mance〔rə'mæns〕, a'wry〔ə'rai〕, de'my〔di'mai〕, prorogue〔prə'roug〕, my'self〔mai'self〕, there'for〔ðɛə'fɔ:〕(but therefore〔'ðɛəfɔ:〕), pro'vost (military)〔prə'vou〕, &e.

c. 均　　勢 (double stress, even stress, level stress)

先の後强勢の所で述べた様 mis'take, be'gin 等弱勢の接頭語で初まる語は後の stem に accent が來るが、然

し其接頭語の意味が非常に明瞭である場合には、自然其接頭語に强勢が加はつて其語は「均勢」の語となる。均勢は accent が引續くといふ所から consective accent といふ人もある。

例 1　'anti-'climax〔'ænti'klaimæks〕,　　're-ar'range〔'ri:ə'rein(d)ʒ〕,

'dis'loyal〔'dis'lɔi(ə)l〕,　　'vice-'admiral〔'vais'ædm(ə)r(ə)l〕

'un'able〔'ʌ'neibl〕,　　'un'satisfied〔'ʌn'sætisfaid〕.

【注　意】

1. mis— と un—(否定辭) は前には弱勢であつたが段々と强勢に傾いてゐる。例へば

(')mis'read, (')un'suitable &c. 'un'covered は 'not covered' の意で un'covered は 'deprived of its cover' の意である。前者は un に强勢のある丈後音節と意味が分離された感じがする。

mistake は後强勢で今尙續いてゐる。

2. 否定接頭辭 in— を有する語は普通其接頭辭に「半强勢」を附する。

ˌindi'rect〔ˌindi'rekt〕, ˌinhu'mane〔ˌinhju(:)'mein〕, &c.

これも然し意味の都合で 'ines'sential〔'ini'senʃəl〕, 'insuf'ficient〔'ins(ə)'fiʃ(ə)nt〕といふ風に double stress にならないにも限らない。

3. 此 double stress の語から更に進めば此接頭語にのみ强勢が附せられて stem の方は弱勢になる例もある。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ˈimpious〔ˈimpiəs〕(比較 ˈpious〔ˈpaiəs〕),

ˈinfamous〔ˈinfəməs〕(比較 ˈfamous〔ˈfeiməs〕),

ˈinfinite〔ˈinfinit〕(比較ˈfiniteˈfainait〕), &c.

d. 對照のための變化 (contrast-stress)

The number of sailing-vessels is steadily decreasing while steamships are steadily increasing. decreasing, increasing は普通には〔di:ˈkri:siŋ〕〔inˈkri:siŋ〕と end stress になるのだが、この文章では對照のため de— と in— とに强勢が移つて ˈinkri:siŋ. ˈdi:kri:siŋ と變るのである。かくの如くして「expression でなく impression だ」といふ時は普通なれば弱勢なるべき ex—. im— 接頭語に强勢が附せられる譯である。尙實際ならば最後の音節に accent があつたのを、この對照の强勢が餘りに屢繰返されたために漸次近代の accent に變つて了つた例に real〔ˈriəl〕, formal〔ˈfɔ:m(ə)l〕, object〔ˈɔbdʒikt〕, subject〔ˈsʌbdʒikt〕等がある。

先の increase, decrease も名詞としては已に前强勢になつてゐる。其他 ˈJanuary, February, ˈcavalry, ˈinfantry, ˈagriculture 等對照の强勢のため前强勢となつたもの隨分澤山ある。

【注意】 1. teen で終る語は ty で終る數詞と間違はぬ爲め〔、—ˈti:n〕〔ˈ—/—〕の樣に後强勢か均勢かが習慣になつて了つた。

fifty〔ˈfifti〕, fifteen〔ˈfiftˈi:n〕, &c. しかし又 fourteen と fifteen の對照を示す場合には〔ˈfɔ:ti:n〕〔ˈfifti:n〕

OL.IVE 香川大学学術情報リポジトリ

となる事勿論である。

2. princess が〔prin'ses〕となつておるのも對照の爲めである。しかし此が attributively に用ゐられた時には〔'prinses'mɛəri〕といふ。

3. access が〔'ækses〕となつて來たのも excess との對照のためである。

4. intern l, external, 等が對照のためには〔'intə:nl〕,〔'ekstə:nl〕となるのは勿論であるが、平常は〔in'tə:nl〕と第二音節に强勢が來るのはどう云ふ譯であらうか。それは音の輕重の法によるのであつて、强勢は輕い音節よりも寧ろ長母音であるとか、又は短母音でも後に重い父音が來る樣な所謂重い音節に附せられるのである。

他に e'ternal, tri'umph l, pa'ternal, pa'rental, a'bundant, in'dulgent, uni'versal, &c.

B (リズム上からの强勢變化) (rhythmic stress)

數個の同樣に强勢のある音節又は數個の同樣に弱い音節を連續して發音するよりも、强弱と交互に所謂リズムをつけて發音する方が容易である。そこで次の樣に三强音節以上の連續は出來る丈避けるのであつて、前强勢の語に先だつ語は均勢でも後强勢でも之を前强勢にして了ひ、反對にその前に强勢音節が來る語は後强勢にして了ふ傾向がある。例へば 1. 均勢→前强。'four'teen shillings は〔'fɔ:ti:n'ʃiliŋz〕, an 'un'known land は〔ən'ʌn noun'lænd〕 2. 均勢→後强。quite 'un'known は〔'kwaitʌn'noun〕, just 'four'teen は〔'dʒʌst fɔ:'ti:n〕3. 後

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

強勢→前強勢。prin'cess（普通後強勢）が the 'princess 'Alice〔ðə'prinses'ælis（-' - -' - -），Cayenne〔kei'en〕が 'Cayenne 'pepper〔'keien'pepə〕. 尙次の例を見よ。

a 'Chinese 'lantern, 'fourteen 'men, an 'india-rubber 'ball, 'Piccadilly 'Circus (but ˌPicca'dilly), St. 'Paul's church'yard, 'Waterloo 'Road(but ˌWater'loo), 'Vauxhall 'Bridge, 'near Vaux'hall (but 'Vaux'hall) 'Constiˌtution 'Hill, an 'artificial 'language (rather than a:ti'fiʃl), a 'diplomatic 'mission (rather than diplə'mætik), 'Salˌvation 'Army (orˌ- '- -'- -), &c.

【注　意】

1. h ndkerchief は〔'hæŋkətʃif〕である。kerchief 丈離せば〔'kə:tʃif〕であるのに、こゝでは却つて〔kə〕は弱く〔tʃif〕の方に少し stress がある。（合成語については更に項を改めて說明す。）
2. No room out'side ! (in'side!) は London の bus の conductor が叫ぶ語であるが、outside は對照の關係からは 'outside とならねばならぬ筈である。然しこれもリズムが勝つて遂に out'side となつたのであつて、此樣に最後の音節に强勢を置く事は又英語の强勢法では大事な一つの傾向である。

C.（統一上からの强勢）（unity stress）

今述べた語の集合の最後の音節又は最後の要素に强勢を置くことは、他方から見れば其前の語或は音節がこのために纏められ統べ括られて一つの統一した觀念を與へることになるのである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

u'pon, through'out, neverthe'less, notwith'standing, when'ever, who'ever,

等は此種の强勢に屬するのである。

【注意】 統一上の强勢は compound の bill-of-'fare, a maid of 'honour 等を參照すれば一層明瞭になるだらう。これ等は皆一つの觀念を示すもので、一つの物である。(比較 a 'maid of 'honour と讀むときは二つの觀念を示す。)

D. (長き Romance 語の强勢)

以上は强勢の原則の大體を述べたのであつて、普通は語の stem に强勢が落ちるのであるが、意味又は音調の具合から種々に變化する事を說明したのである。これは後强勢のフランス語が英語に同化される場合も同樣であつて、意味上重要でない佛語の後音節の强勢は英語になると自然前音節の方に移動した。しかし三綴以上の語に於ては前音節中どの音節に accent が移されたかが問題であるが、これは大體リズムによつて定つたものと考へてよい。

かくの如くにして、

—ion ('nation), —ian (mu'sician, his'torian), —eon ('dungeon), —ean (mediter'ranean), —ia ('Asia), —io ('studio), —ium (sym'posium), —ial ('special, 'genial), —ical (po'eti al), —imal ('animal), —inal (o'riginal). —ual (indi'vidual), —acal (demo'niacal) [ˌdi : mə'naiək (ə) l] —eral('numeral), 他の —al

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(di'agonal, 'hospital, 'festival, 'interval, &c.), —ate('separate), —at(prole'tariat〔proule'tɛəriət〕), —ify (per'sonify), —efy('rarefy〔'rɛərifai〕, 'liquefy〔'likwifai〕), —ity(no'bility), —ety ('nicety〔'naisiti〕), —acy (aris'tocracy) —asy, isy('fantasy, hy'pocrisy), —pathy('sympathy), —amy, emy, omy(po'lygamy, 'enemy, a'natomy), —ny, ony ('calumny, 'euphony), —ody, edy, idy('psalmody, 'comedy 'perfidy), —logy (a'nalogy), —graphy(gə'ography), —sophy(phi'losophy), —opy, upy('canopy, 'occupy), —metry(ge'ometry), —ury('usury) —他の ry('industry, 'victory), —他の y ('monarchy, 'energy, 'galaxy, &c. 同様にして a'postrophe〔ə'pɔstrəfi〕), —ure ('signature), —ant, ance ('arrogant, 'radiance), —ent, ence ('innocent, de'ficience), —ment ('testament), —ize, ise, ('sympathize), —ile ('mercantile), —ine ('discipline), —ite ('opposite), —et ('parapet), —ive ('substantive), —ous (u'nanimous), —ist ('satirist), —ism ('criticism), —ic('lunatic), —ac(de'moniac), —ar('popular), —er('character), —or('bachelor), —meter(ba'rometer), —logue〔'catalogue〕, —tude, ute(vi'cissitude, 'absolute), —able (終りより四音節目) ('comparable) 等の語尾を有する三音節以上の語はリズムの關係で以上の如く大抵最後から三番目の音節に强勢がある。而して在來の强勢は半强勢に變るのである。,compo'sition, ,provi'dential, &c. しかしこれにも次のやうな例外がある。

—ean : Euro'pean, Epicu'rean, &c.

—al : (1) 'spiritual, 'national (spirit, nationよりの類推) 等。(2) de'nial, ca'rousal, ar'rival, pro'posal,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

de'rusal,（動詞よりの類推）等。(3)uni'versal, in'fernal, e'ternal（重い音節に强勢）等。最後の場合の如く名詞、形容詞の內 -al の附くものにして、その前に父音が二つ以上あるものは -al の直前の音節に必ずこの種の强勢がつくと思つてよい。例へば ca'thedral, inci'dental, an'tumnal, an'cestral, bap'tismal, or'chestral, se'pulchral, ,depart'mental, instru'mental, &c. (4) 更にその前に二重母音又は長母音が來るものも同樣である。cy'cloidal, tri'bunal, matu'tinal, homi'cidal, hyme'neal, &c. 類似の語尾に -el, -ol がある。'citadel〔sitədl〕, 'parallel〔'pærəlel〕, 'protocol〔'proutəkɔl〕はリズミツクであるが、ap'parel〔ə'pærəl〕, e'namel〔i'næm(ə)l〕は重要なる音節の强勢であり、parasol〔,pærə'sɔl〕, person'nel〔,pə:sə'nel〕は佛蘭西語からの借用語である。

【注意】※ Chaucer 等では cor'recci,oun, con'dici,oun の如く 'ioun と綴り語尾は二綴であつた。それが16世紀以前に重要ならぬ部分だといふ理由で語尾の强勢（半）が除かれ、遂に今日の如く〔i〕が〔j〕となつて、condition〔kən'diʃən〕となつたのである。こゝでは强勢を發見するための便宜上 cian〔ʃən〕, cial〔ʃəl〕を共に二綴とみなして置く。即ち此語尾を持てる語は最後より三綴目に强勢が置かれる譯であるから、結局其語尾の直前の音節に强勢が落ちることになるのである。この類の語尾の重要なるものを擧げると、

—tion〔ʃən〕〔ʒən（notion〔'nouʃən〕, &c., transition〔træn'siʒən〕）

—sion〔ʃən〕〔ʒən〕（母音の後）（expansion〔iks'pænʃən〕, mission〔'miʃən〕, &c., incision〔in'siʒən〕,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

occasion [ə'keiʒən], &c.)

—cian, sian, tian [ʃən] (musician [mju'ziʃən], Russian ['rʌʃən])

—cial tial [ʃ(ə)l] (special ['speʃəl], essential [i'senʃəl]

—tious, scious, cious. ceous, sicous [ʃəs] (cautions ['kɔ:ʃəs], precions ['preʃəs], conscious ['kɔnʃəs], dissentious [di'senʃəs], herbaceous [hə:'beiʃəs])

—cience, science, tience [ʃəns], cient, tient [ʃənt] (conscience ['kɔnʃəns], efficience [i'fiʃəns], patience ['peiʃəns])

—gion, geou [dʒən] (region [ri'li:dʒən], dungeon ['dʌndʒən] but, pigeon ['pidʒin])

—gious, geous [dʒəs] (religious [ri'lidʒəs], gorgeous ['gɔ:dʒəs])

—teous [tiəs] [tʃəs] (righteous ['raitʃəs], piteous ['pitiəs])

—cheon [tʃən] (luncheon [lʌntʃən]。

この内 tion, tian, tial はその前に s のある場合 tion は [tʃən], tian は [tjən] [tiən], tial [tjəl] となる。

question ['kwestʃən], suggestion [sə'dʒestʃən]; Christian ['kristjən],

fustian ['fʌstiən]; bestial ['bestjəl], celestial [si'lestjəl].

更にこの語尾の次に强勢ある語尾が二重に附加される場合には前の强勢は半强勢に變る。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

christianity 〔,kristi'æniti〕,　　questionnaire 〔,kwestʃə'nɛə〕

—ate :

'compensate, 'contemplate 等の如く語尾の前に二つ以上の父音ある多くの語は元語尾の前の重い音節に强勢が置かれたのであつたが、今では大概リズムの上から最後から三番目の音節に强勢が移つた。これは尤も ,compen'sation 等からの類推も手傳ふのである。しかし中には re'monstrate 〔ri'mɔnstreit〕 ※al'ternate (形) ※con'summate (形) 〔ɔ:l'tə:nit〕 〔kɔn'sʌmit〕 等の如く尙最後から二番目の音節へ强勢の落ちるものもある。estimate, ges'ticulate, in'tercalate, in'toxicate, (ate の前父音一つ), 'concentrate, 'graduate. 'illustrate. ',inundate &c.

※alternate (v.) 〔'ɔ:ltə:neit〕 consummate (v.) 〔'kɔnsʌmeit〕.

處でこの —ate で終る語には (1) 單に形容詞又は名詞として用ひられるもの (2) 動詞としてのみ用ひられるもの (3)名詞又は形容詞及び動詞として用ひられるものがあるが、最後の場合に於ては名詞又は形容詞の—ate 語尾は 〔-it〕 と弱勢によみ、動詞の —ate 語尾は 〔- -eit〕 と半强勢によむ。

desolate (adj) 〔'desolit〕 (v.) 〔'desoleit〕,

separate (adj) 〔'sepərit〕 (v.) 〔'sepəreit〕,

estimate (s.) 〔'estimit〕 (v.) 〔'estimeit〕

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

隨つて（2）の場合は〔—eit〕（1）の場合は〔it〕とよむ。

（2）educate（v.）〔'edjukeit〕, hesitate（v.）〔'heziteit〕, violate（v.）〔'vaiəleit〕, communicate（v.）〔kə'mju:nikeit〕, &c.）

（1）private（s.adj.）〔'praivit〕, candidate（s.）〔'kændidit〕, &c.

（例外 cognate（s.adj.）〔'kɔgneit〕, innate〔'i'neit〕）

以上の如く —ate は弱勢、半强勢に定つてゐる樣であるが、動詞中には —ate に强勢のあるものもある。

rotate〔rou'teit〕, vibrate〔vai'breit〕, migrate〔mai'greit〕, &c.

—at：aristocrat はリズムの上から終から三節目〔æ'ristəkræt〕に强勢が置かれるべきであるが、〔,æris'tɔkrəsi〕からの類推で〔'æristəkræt〕とする方が普通の發音である。ae'grotat はラテン語 aegrōtus の類推である。

—y：最後の —y が French の强勢母音を表してゐない語に於てはリズム强勢は語尾から四節目の音節に落ちる。即 'military, 'necessary, con'temporary, 'dormitory, &c.

語によつては類推の上から更に尙一節先に進むものがある。即ち 'dictionary（'diction より）, 'dedicatory（'dedicate より）。尙他に類推から强勢の附いたものには、終りより三節目の者に dis'pensary, ,parlia'mentary, I'lusory, co'rollary, &c.,（dispense, &c., より）

終りより四節目の者に'allegory, 'ceremony, la'boratory, 'category, 'dysentery, &c.,（,alle'gorical, ,cere'monious

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

la'borious, ,cate'gorical, ,dysen'teric, &c. より), 'excellency ('excellence 又は 'excellent より), 'accuracy (等—ate で終る名詞形容詞に附合する —acy で終る語), 'melancholy, 'controversy, 'contumacy, 'contumely, &c.

序に希臘語から來て語尾の e を〔i〕と發音する語をあげて置く。acme, a'nemone, a'pocope, a'pophyge, a'postrophe, ca'tastrophe, fi'nale〔fi'nɑ:li〕、para'goge, 'syncope 'strophe, sy'necdoche. 尙終りより二音節目の va'gary〔vəˈgɛəɹi〕は low Lation の vagāri の類推、 ca'nary〔kəˈnɛəri〕は Latin の canāria の類推と見てよからう。

—ure：この語尾を有する語は大抵類推上から强勢を受ける。即ち

en'closure, com'posure, 'architecture, 'literature, &c., (en'close, com'pose, 等より), 、carica'ture〔'kærikəˈtjuə〕(Italian stress 、carica'tura による)。

しかし 'signature, dis'comfiture, 'sepulture, 'miniature〔'minjətʃə〕, quadrature〔'kwɔdrətʃə〕, 'agriculture, 'horticulture, 'judicature は皆リズム上から第一、第二音節に强勢をうける。

又 nomenclatur は -'- - - 及び '- - - - となる。

ad'venture は重い主要な音節に强勢がついたのである。

-ant -ance, -ent, -ence：

(1) 類推（動詞）による强勢には ac'quaintance, im'portant, re'membrance, ad'herent ap'parent, ,inter

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ˈference, preˈcedence 等あり。又 (2) aˈbundant, .anteˈcedence, imˈprudence, triˈumphant, 等重い音節に强勢の附いたものがあり、又 adoˈlescent, efferˈvescent 等 -scent の前の音節に强勢あるものは皆羅典語からの類推である。

quintessence は ˈessence の類推によつて〔kwinˈtesəns〕となり ˈconversant は現今では第一音節に强勢を置くことに注意せねばならぬ。

かくて (1) 此語尾の前に二つ以上の父音のある時、又は (2) その前に二重母音或は長母音ある時は、その直前音節に强勢が來る譯である。しかし語尾の前の父音が一つか又は短母音が前に來る時は規則通りに終りから第三音節に强勢が落ちる。規則通りなれど間違へ易いものを擧げる。

ˈmaintenance, coˈincidence, ˈconsequent, ˈeloquent, ˈinfluence, ˈprecedent, (s.), ˈreference, omˈniscience〔ɔmˈnisiəns〕

-ment：類推法によるものには

adˈvancement, emˈployment, etc., (advance 等より)。aggrandizement〔əˈgrændizmənt〕, advertisement〔ədˈvə:tismənt〕はリズム法によつたもの、〔ædvəˈtaizmənt〕は類推法に依つたもので米國音である。ˈinstrument はよく間違ふ。

-ise：ˈcharacterize, ˈnaturalize,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

fa'miliarize 等終りより四節目の强勢は類推のためである。

-ile, -ine, -ite, -et : 'juvenile, 'infantile, 'mercantile, 'puerile 等はリズムによつて何れも第一音節に强勢がある。-ile は今の讀方では〔-ail〕で〔'pju:ərail〕式になる。殊に長い語では半强勢になる。profile〔'proufi:l〕は佛蘭西式に〔i:〕であるが、强勢は第一音節にある。しかし又〔-fail〕といふのもある。facsimile は〔fæk'simili〕である。-ine は 'feminine, 'masculine, 'medicine, 'genuine 等では〔-in〕と弱勢によみ、'columbine, 'eglantine, 'porcupine, 'serpentine では〔-ain〕と半强勢によむ。-ite は 'jacobite, 'dynamite 等では半强勢〔ait〕とよむ。三綴の語は大概リズムによつて初音節に强勢がある。勿論 magazine 等の佛語は別扱である事は前に述べた。しかし 'nicotine, 'glycerine, 'quarantine 等の强勢は第一音節にある。-et で interpret は類推によつて第二音節に强勢のある事は注意せねばならぬ。

-ive : 'negative 'substantive, res'torative, in'dicative, de'finitive, inter'rogative, al'ternative, 'sedative はリズムの强勢である。類推によつて語尾から四節目に强勢ある語には、

sig'nificative, i'maginative, 'figurative 'vindicative, etc. がある。

demons rative は普通〔di'mənstrətiv〕なれども類推により〔'deməns treitiv〕ともいふ。

類推により語尾から二節目に强勢ある語には ob'jective, at'tentive, col'lective, in'structive, ex'cessive, dif'fusive, pos'sessive 等語尾 tive の直前に父音あるもの及び語尾 sive〔siv〕を有する凡ての形容詞がある。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

しかし recita'tive は French 流に〔,resitə'ti:v〕である事に注意せねばならぬ。

-ous : ceous, cious, tious, geous, gious については -ion の〔注意〕で述べた。こゝのはこれ等以外の場合であつて、大體に於て終りから第三音節に强勢の來るものと思つてよいが、-ous の前に父音が二つ以上ある場合は矢張語尾から第二音節目の重い音節に强勢が移動する。'frivolous, 'hideous, con'spicuous, 'generous, 'studious, vic'torious, &c. di'sastrous, e'normous, mo'mentous, &c.

しかし so'norous, tre'mendous, stu'pendous 等の終りから二節目の强勢、ludicrous の三節目の强勢は Latin の sonōrus, tremĕndus, lūdicrum 等の accent の類推と見られる。'spirituous は 'spirit の類推であることは spiritual と同じである。

-able, -ible :

リズムによつて終りより四音節目に强勢のつく語に間違ひ易いものが多くある。'comparable, (in) de'fatigable, 'despicable, 'lamentable, 'preferable, 'referable, 'reparable, 'eligible 等注意せねばならぬ。しかしこの語尾の語には類推によるものが多い。

a'greeable, unfor'gettable, 'comfortable, 'recognizable, 'disciplinable, etc.

又中には類推、音律兩方の發音法により二樣によむ語もある。

disputable〔dis'pju:təbl〕〔'dispju:təble〕,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

transferable 〔trænsˈfə:rəbl〕〔ˈtrænsf(ə)rəbl〕, etc.

同類の類推には

reˈsistible, reˈsponsible 等がある。

(in)comˈpatible が ˈcomparable 流にならぬのは com が屢弱勢である所から來た類推と見る。reˈfrangible, deˈlectable は弱勢接頭辭と第二音節の重さによる。又 dissoluble は〔ˈdisɔljubl〕とも〔diˈsɔljubl〕とも發音する

-ist -ism：

類推によるものには

ˈpositivist, (-ism), ˈrationalist, (-ism) ˈcapitalist の類がある。

pianist 〔ˈpjænist〕, capitalist 〔kəˈpitəlist〕は教育ある人の間に多く行はれ共に音律の强勢である。

-ic：リズム上からは終から三音節目に强勢のある事は前に云つた。即ち先の lunatic 以外に ˈcatholic, arabic, ˈcholeric, ˈplethoric, aˈrithmetic, cliˈmacteric, ˈpolitic, ˈarsenic, eˈphemeric, ˈrhetoric, ˈbishopric, ˈheretic, ˈsplenetic, ˈbismuthic imˈpolitic, ˈturmeric, ˈagaric のやうなのがある。しかしかゝる種類のものは極少くて、-ic を有するものは大概最後から二番目の音節に强勢が置かれると思つてよい。これは〔-ical〕又は〔—icism〕の形によつたものであつて、先の種類のものでも al を附すると悉く强勢が一音節後方に移動する事に注意せねばならぬ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

his'toric, me'chanic, ter'rific, 'cri ic, pro'saic, ener'getic, ane'gyric, oce'anic, etc. he'retical arith'metical, po'litical, etc.

又次の如き區別もある。

arithmetic (n.) 〔ə'riθmətik〕, (adj.)〔,æriθ'metik〕, arsenic (n.) 〔'a:ssnik〕, (adj.) 〔a:'senik〕,

climacteric 〔klai'mæktərik〕〔,klaimæk'terik〕.

【注意】 この强勢で注意すべきは本來のアクセントに關係なしに -ic が附くと其前にアクセントが移動する事である。'history -his'toric, 'atom -a'tomical. climacteric の如く二以上アクセントある場合は -ic の直前に强勢、他に半强勢ある事は勿論である。

,indi'vidual -,indi,vidua'listic

しかし其後に更に强勢のあるべき語尾が來る時は -ic の直前のは半强勢に變る。

'technic -,techni'cality; 'practical -,practi'cality.

-ac

之に -al が附いた場合には强勢は變る。

demoniacal 〔dimou'naiəkl〕, monomaniacal 〔mɔnomə'naiəkl〕, etc.

-ar, -er, -or :

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

類推からの强勢が極めて普通である。

com'mander, pos'sessor, 'persecutor, 'orator, in'telligencer, inter'locutor, pro'locutor, etc.

-meter :

'kilo、met:e, 'gas-,meter は類推に屬する。

【注意】1. 'article, 'uniform 等英語には終りから二音節目に〔i〕音があり、第三音節に强勢の來る語が非常に多い。以上に出て來た以外のものをあげると、

'Asia, ap'propriate, A'merican, sig'nificant, 'homicide, 'article, 'president, 'uniform, 'diligent, 'similar, an'nihilate, 'cardinal, o'riginate, 'dominant, 'continent, 'luminous, 'studio, 'positive, 'solitude, 'furniture, 'premier, 'opium, 'cultivate, ad'minister, ad'ministry, &c.

【注意】2. -y（殊に -ary, -ory, -mony, -tery）或は -ative, -ature 等で終る語の內には終りから四番目、五番目の音節に强勢のあるものが少くない。（-y,-ure,-iveの節參照）。

'dictionary, 'imaginative 等の例は前に說明して置いた。

(四節目)（リズム）'military, 'necessary, 'adversary 'inventory, 'minatory, 'peremtory, 'dormitory, 'promontory, 'desultry, 'monastery, 'cemetery, &c.（類推）'allegory, 'category, 'prefatory, 'repertory, 'matrimony, com'municative, sig'nificative, 'literature, 'temperature, 'palliative, fa'miliarize, 'characterize, &c.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（五六節目）（類推）con'ciliatory, con'gratulatory, sig'nificatory, 'circulatory, 'respiratory, 'undulatory, 'veterinary, 'disciplinary, 'purificatory, 'obligatory, 'applicatory, 'disciplinarily, 'obligatorily, &c.

【注意】3. 多音節語中終りから第二音節に强勢あるものは已に說明しておいたが、こゝに明瞭なものを纏めておく。

1. 〔-sive〕, 〔一父音＋tive,〕の前：de'cisive, pro'ductive.

2. -ic（al）の前：fa'natic. he'roic pro'saic（例外 'catholic 等）

3. -a, -o, -um の前：re'gatta.〔ri'gætə〕 pa'goda.〔pə'goudə〕 'torpedo〔tɔ:'pi:dou〕pro'viso〔prə'vaizou〕, a'larum〔ə'lɛərəm〕, Colos'seum〔,kɔlə'siəm〕 &c.（例外 'Algebra 'orchestra, 'cerebrum 'gondola, 'replica, 'Africa, &c. mamma（母）〔mə'ma:〕,（乳房）〔'mæmə〕）

4. -al, -ant, -ance, -ent, -ence, -ons, 等の前に父音が二つ以上あるか、又は長音二重音ある場合：autumnal, abundant, imprudence, &c.

5. 類推による場合：de'nial, inter'ference, tre'mendous, &c.

【注意】4. 長い語の半强勢の位置は一般にリズムによつて定るのである。'ambi'guity, 'compu'tation, re,sponsi'bility, ,incon'venience, 'incon、verti'bility, in,kɔmkrəhensi'bility, &c.

【注意】5. 注意すべき語。'capuchin, 'decorous, 'derelict, 'dolorous, 'grandiose, 'impious〔'impiəs〕,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

'intellect, 'opportune〔,- ⌐|-〕'satisfy, sobriquet〔'soubrikei〕, 'subaltern, al'beit, de'velop, ,acqui'ese〔,ækwi'es〕, arti'san, ascer'tain, cara'van, minu'et, ,parti'san（黨員）, 〔'- - -〕（矛）, ,vio'lin（樂器）〔'- - -〕（三色菫色素）'viola（花）〔'vaiələ〕（樂器）〔vi'oulə〕,

'automobile, 'predecessor, a'cetylene, di'ocesan, du'biety, so'liloquy, meta'morphosis, apothe'osis, avoirdpois〔,ævədə'pɔiz〕.

E（不定强勢）

以上述べた通りで、一定の語が意味、リズム、統一の上から一定の强勢を取る事は分つたが、さて同形の語でも其品詞によつて强勢の異つて來る場合が大分ある。そして名詞或は形容詞に用ひられる場合は主として前强勢であり、動詞に用ひられる場合は後强勢である。

例へば、blackmail（名詞）〔'blæk'meil, '- -〕,（動詞）〔,blæk'meil〕, upset（名）〔'ʌpset〕,（動）〔ʌp'set〕, &c. これはしかし只に native words 丈に限らず Romance 語に於ても、一つは類推で名詞形容詞は前强勢、動詞は後强勢となつて居る。この種の accent を distinctive accent といふ。

absent　形容詞〔'æbsnt〕　動詞〔æb'sent〕

abstract 名、形〔'æbstrækt〕動詞〔æbs'trækt〕

全體に亘つてもう少しこの類の語を示すと次の樣なのがある。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

accent, affix, augment, collect, commune, compact, compound,
compress, concert, concord, concrete, conduct, confine, conflict,
consort, contest, contract, contrast, converse, convert, convict,
convoy, costume, decrease, descant, desert, detail, dictate
digest, discord, discount, escort, essay, export, extract,
ferment, frequent, forecast. foretaste, impact, import, impress, imprint,
incense, increase, infix, inset, insult, object, perfect,
perfume, permit, pervert, prefix, premise, presage, present,
proceed, produce, progress, project, protest, rebel, record,
refuse, regress, retail, subject, suffix, survey, torment,
traject, transfer, transport, undress, &c.

【註】 Old English に於ては stress は語の第一音節に置かれた。合成語に於ても一般に同樣であるが、只附加分子と動詞とから成る合成語は其動詞に强勢が置かれた。かくて接頭辭のついた動詞は動詞の root-syllable に强勢があり、名詞は語頭に强勢があつた。接頭辭によると名詞、動詞により形を異にしてゐたものもある。'and-giet(=intellect), on-'gietan (= to 'know); 'æf'ðanca (=displeasure), of 'ðyncan (=be displeased)。此差違がなくなつてからも、强勢の差は依然として殘り他の新しい語にも類推的におし廣められた。(Jespersen p. 174)

【注意】1. out-, over-, の語は此例の内に入るものが多い。

outlaw (名) (動) ['autlɔ:] の如き場合もある。

【注意】2. detail, perfume, survey (名詞) は時々後强勢になる。又 discount (動) は前强勢、後强勢何れにもなるが、前强が普通である。今次に特殊なものを對照して見る。

動、名詞共後强勢—account, command, neglect, respect, reward, &c,

動、形容詞共後强勢—complete, direct, obscure, select, correct, &c.

動、名詞共前强勢—cover, limit, measure, offer, follow, purport, &c.

動、形容詞共前强勢—narro , stable, quiet, empty, double, &c,

【注意】3. dictate (名) ['diktit] (動) [dik'teit] premise (名) ['premis] (動) [pri'maiz] の語尾の發音に注意せねばならぬ。

又三綴以上の語で上記の語と同樣に名詞形容詞の場合には前强勢となり動詞の場合には第二節又は最後の節に强勢の來るものには、

attribute (動詞) [ə'tribjut]　　envelope (動詞) [in'veləp],

environ (動詞) [in'vaiərən]　　counterbalance (動詞) (其他 counter-の語) [,kauntə'bælənsˌ]

decompound (動詞) [,di:kəm'paund],　　financier (動詞) [,finæn'siə],

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

interchange（動詞）〔ˌintə(:)ˈtʃein(d)ʒ〕, interdict（動詞）〔ˌintə(:)ˈdikt〕, etc.

【注意】4. 語によりては動詞として用ひられた場合に後强勢を取らず只其最後の音節に半强勢を取る事がある。例へば -ate, -ment で終る語の大概はこれである。

compliment	（名）	〔ˈkɔmplimənt〕	（動）〔ˈkɔmpliment〕,
alternate	（形）	〔ɔ:lˈtə:nit〕,	（動）〔ˈɔ:ltəneit〕,
associate	（名、形）	〔əˈsouʃiit〕,	（動）〔əˈsouʃieit〕,
experiment	（名）	〔iksˈperimənt〕	（動）〔iksˈperiment〕,
estimate	（名）	〔ˈestimit〕,	（動）〔ˈestimeit〕,
intimate	（名、形）	〔ˈintimit〕,	（動）〔ˈintimeit〕,
graduate	（名）	〔ˈgrædjuit〕,	（動）〔ˈgrædjueit〕.
moderate	（名、形）	〔ˈmɔd(ə)rit〕,	（動）〔ˈmɔdəreit〕,
ornament	（名）	〔ˈɔ:nəmənt〕,	（動）〔ˈɔ:nəment〕,
separate	（形）	〔ˈsep(ə)rit〕	（動）〔ˈsepəreit〕,
supplement	（名）	〔ˈsʌplimənt〕,	（動）〔ˈsʌpliment〕, &c.

動詞の場合 -ate は〔—eit〕, -ment は〔-ment〕と讀むことに注意せねばならぬ。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

【注意】5. 同形の語で名詞、形容詞に用ひられてゐる場合、前者は前强勢、後者は後强勢をとるものも多い。

例へば

expert	(名) ['ekspə:t],	(形) ['ekspə:t, - '- (not attributive)],
instinct	(名) ['instiŋ(k)t]	(形) [in'stiŋ(k)t],
coronal	(名) ['kɔrənl]	(形) [kə'rounl],
precedent	(名) ['presid(ə)nt]	(形) [pri'si:d(ə)nt, '- - -]
supine	(名) ['sju:pain]	(形) [sju:'pain],
compact	(名) ['kɔmpækt]	(形) [kəm'pækt],
august	(名) ['ɔ:gəst]	(形) [ɔ:'gʌst],
minute	(名) ['minit]	(形) [mai'nju:t]
converse	(形) ['kɔnvə:s]	(動) [kɔn'və:s]
-ly	(副) ['kɔn'və:sli, - '- -]	
(例外 saline	(名) [sə'lain]	(形) ['seilain]

【注意】6. 又同じ語でも形容詞として用ゐられた場合次に來る强勢名詞との關係から眞中の音節にリズムの强勢がつく語が少しある。例へば

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

alternate　（形）〔ɔ:l'tə:nit〕,　（動）〔'ɔ:ltəneit〕.

consummate（形）〔kən'sʌmit〕,　（動）〔'kɔnsʌmeit〕, etc.

【注意】7. 次は同綴で全く違つた意味をあらはす場合がある。此場合も先の場合と同じく名詞、形容詞は前強勢、動詞は後強勢となる。

commune　（名）〔'kɔmju:n〕,　（動）〔kə'mju:n〕,

collect　（名）〔'kɔlekt〕,　（動）〔kə'lekt〕,

desert　（名）〔'dezət〕,　（動）〔di'zə:t〕,

dige t　（名）〔'daidʒest〕,　（動）〔dai'dʒest〕,

incense　（名）〔' nsens〕,　（動）〔in'sens〕,

object　（名）〔'ɔbdʒekt〕,　（動）〔ɔb'dʒekt〕,

refuse　（名）〔'refju:s〕,　（動）〔ri'fju:z〕, etc.

gallant(brave)〔'gælənt〕, (amorous) 〔gə'lænt〕,

invalid(infirm) 〔'invəli:d〕, (not valid) 〔in'vælid〕,

contrary (opposite) 〔'kɔntrəri〕, (obstinate) 〔kən'trəri〕, etc.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（4）「合成語の强勢」

以上は各獨立した單語の强勢を述べたのであるが、今度は其獨立し得る二個以上の語が一つの group をなして使はるゝ場合、即ち合成語の强勢について述べよう。こゝにいふ合成語は必ずしも一語として續け（或は hyphen を以て續け）られてはない。各別々に離して書いてあることもある。昔の英語に於ては形容詞で初まる合成語と形容詞と次の語とを離して書いた連語の場合とは後者の方に於てのみ行はれた形容詞の語尾の變化によつて明瞭に區別せられた。故に强勢については兩者の區別なく同樣に主に前强勢が用ひられたが、近代英語に於ては此形容詞の語尾變化といふものがなくなつたが爲め、强勢の變化を用ひて之を區別するより外なくなつた。こゝに於て現代英語の强勢の特徵は著しく均勢即ち兩强勢が發達して來た。現代英語に於ては一方は ˈquicksilver の如き强勢をとり、一方は ˈgood ˈman, ˈgood ˈdeed の如き均勢を取るに至つたのである。又 genetive の場合に於ても ˈking's ˈson と ˈcrowˈsfoot の如き區別を見る樣になつた。尙均勢は上の如く二つの異りたる意義を有せる語の連續を示すのみでなく、更に進んで兩者合して一つの意味を示す次の如き場合に於ても用ひられる樣になつた。例へば

ˈhigh ˈroad, ˈpublic ˈhouse, ˈeasy ˈchair, ˈgreat-ˈcoat &c., ˈcommon ˈsense, ˈhigh ˈtreason &c.

【注意】・上の例の如く現代英語に於ては普通の「形容詞又は genet ve ＋ 名詞」の連語の時は均勢である。更

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に次に他の場合を擧げて見よう。

A （均　勢）（'- '-）の場合

a 「名詞」+「名詞」（初めの語が形容詞に類似の場合）

□第一語が第二語に似たものを示す時

sponge-'cake (=sponge-like cake), 'bow-'window, 'rock'salt, 'loaf 'sugar, 'copper 'beech, 'moss 'rose, 'silver 'sand, &c.

□第一語が第二語の性又は齢をあらはす時

'man 'cook (=male cook), 'lady 'doctor, 'boy 'messenger, 'infant phe'nomenon, 'tom'cat, 'buck 'rabbit, 'poll 'parrot, ('he-'goat, 'she-'goat), &c.

□第一語が第二語を作れる材料を示す時

'silk 'thread, 'brick 'house, 'stone 'wall, 'gravel 'walk, 'straw 'hat, 'silver 'spoon, 'olive 'oil, 'meat 'pie, 'jam 'tart, 'ginger 'ale, 'ginger 'beer, &c.

□Road, Square, Place, Crescent, 等の如き一般的の場所を示す名詞が他の名詞によつて（屢箇有名詞又は形容詞を添へなどして）限定さるゝ時。地名を示すものには、

'Oxford 'Road, 'Mincing 'Lane, 'Hanover 'Square, 'London 'Bridge, St. 'James's 'park,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

St. 'Paul's 'Churchyard, 'Windsor 'Castle, 'Grosvenor 'Place, &c.

又土地の產物を示すものには、

'Turkey 'carpet, 'Ceylon 'tea, 'India'rubber, &c.

【注意】 Street の場合は類似の場合があまりに多いから自然對照上前强勢となる。

'Oxford Street, 'High Street, 'Prince's Street, &c.

その他之に類するものは 'Mansion House, &c.

b 「名詞」+「形容詞」

'Prince 'Royal, 'poet 'laureate, 'prince-'consort, 'governor-'general, etc.

c 「形容詞又は副詞」+「形容詞」

此中には又名詞として用ひらるゝものが多い。

'deaf-'mute, 'north-'west, 'whitey-'brown, 'greenish 'yellow; 'dead-'ripe

'half-'mad, 'red'hot, 'broiling'hot, 'over-'anxious, &c.

從つて「形容詞」+「名詞+ed」の場合も均勢である。

'old'fashioned, 'open-'minded, 'down'hearted, 'short-'sighted, etc.

又類推により numerals の合成詞も均勢である。(名詞又は形容詞として用ひ得)。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

'twenty–'one, a' hundred and 'ten, 'two 'hundred, etc.

【注意】1. good–looking 〔'gud'lukiŋ〕(Ripman); 〔– '–〕 handsome, 〔'– –〕 of virtuous appearance (Concise Oxford Dictionary).

【注意】2. —teen の附く數詞も 'twenty–'one 等の合成數詞の類推で兩强勢をとる。

'thir'teen, 'nine'teen, &c.

d 「副詞」+「動詞」及び「動詞」+「副詞」形の多數の合成動詞

'fore'warn, 'over'load, 'out'bid, 'under'go &c.

'pass 'by, 'break 'down, 'take 'in, 'look 'out, 'run a'way, 'show 'off, 'lead 'on, &c.

【注意】1. 「動詞+副詞」の結合詞に於ては前には後强勢であり今も尙屢後强勢を取るが段々兩强勢に傾く。(Jespersen)

【注意】2. 以上の動詞から語尾の變化を以て作つた「名詞」及び「形容詞」は兩强勢である。

'fore'runner, 'fore'warning, 'passer–'by, 'looker–'on, 'grown 'up, 'broken 'down, etc.

又以上の動詞が意味の變化なしに名詞に變る時にも兩强勢である。(しかし明かに意味が變化して名詞又は形容詞に變る時は前强勢が用ひられる。)

an 'over'load, a 'look–'out, a 'break–'down, &c;

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(a ′drawback〔邪魔物〕, a ′go-between〔媒介人〕,

′tumble-down (倒れさうな),

′overwork (名)〔′ouvəwə:k〕(extra work), 〔′- ′-〕(excessive work), (Jones による) etc.

【注意】 3.「副詞」+「動詞」の動詞の場合に副詞が普通の意味を失ふ (例へば over が in excess, too much 等の意味でなくなる) 時は後强勢を取り、副詞には medium stress がつく。

,over′look, ,over′whelm, ,up′hold, ,under′take, ,fore′go, &c.

しかしこれが名詞に換る時は前强勢となることは前注意を見れば分る。

′overthrow, ′overwork (or ′- ′-), ′overhang (or ′- ′-), etc.

e 「合成詞」に類する者

(1) 或 prefix を有する語

明瞭なる意味を有し語幹と引離して發音する事の出來る prefixes が獨立の語として感ぜらるゝ樣になり、prefix と語幹は兩者相平均して均勢を受くるやうになる。

′unbe′lief, ′mis′conduct, (but mis′take) ′non′conduct, ′ex-manager ′sub-com′mittee, ′archi′bishop, ′anti′socialist, ′discon′tent d, ′un′kind, ′un′seen, ′un′covered (=not covered, un′covered =deprived of its cover) ′super′human, ′un′fix,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ˈunˈcover, ˈmisˈspell, ˈunderˈbred, ˈgainˈsay, ˈre-eˈxamine,

ˈre-ˈcover (ˈriːˈ—=cover again. reˈcover=come back to health,) etc.

(2) 間投詞

出來うる丈各音節を高聲に發音する努力から前後兩音節に屢均勢を置く。

ˈhulˈlo! ˈbraˈvo! ˈaˈmen! ˈenˈcore!

(3) 多くの外國語殊に固有名詞

これも明瞭に發音する努力よりして均勢にする。

ˈBerˈlin, ˈChiˈnese, ˈCarˈlisle, ˈCarˈlyle, ˈWaterˈloo, ˈDunˈdee ˈVauxˈhall, etc.

かくの如くして兩强勢は兩成分を共に明瞭になす丈兩者を同等の地位に置き、幾分之等を引離す如き性質を有つてゐる。

之に反して前强勢又は後强勢即ち uneven stress（偏强勢）は一成分を他の一つの成分に附屬せしめるか或は兩者の密接なる論理上の統一を示すかである。これは兩成分を一層密接に結合し又は全體の意味を孤立せしめる一つの手段に過ぎないと見てもよい。例へば ˈblackbird は前後兩語が論理上統一されて〔ˈblackbird〕といふ一つの觀念を與へて居る。之を ˈblack ˈbird と比較すれば前者が統一觀念なることは明瞭となるであらう。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

B （前强勢）（'－ －）の場合

前節で述べた様に古代英語の時代から英語の合成詞は前强勢の傾向がある。

a.「名詞又は形容詞」+「名詞」

□因果關係を示す時

（第一成分が第二成分の目的（purpose）を示す場合）

'toyshop, 'greenhouse, 'fireplace, 'flowerpot, 'pocketbook, 'dancing-master, 'coal-mine, 'post-office, 'footpath, 'schoolroom, 'dining-room, 'summer-house, etc.

（第二成分が第一成分の結果又は其關聯を示す場合）

'rainbow, 'lampblack, 'water-colours, 'sunflower, 'thundercloud, 'thunderstorm, to'bacco-smoke, 'rain-water, etc.

□現象又は行爲を示す場合

（第一成分が第二成分の直接目的であるもの）

'painstaking, 'bookseller, 'bloodshed, 'manslaughter 'goldsmith, 'shoeblack, 'flower-show,

（第一成分の第二成分に對するその他の關係）

'earthquake, 'grasshopper, 'walking-excursion, 'dinner-party, 'sunrise, 'eyesight,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

'priestcraft, 'headache, &c.

□自然物又は各種の人間を表はす合成詞又は一般的の時を示す語尾のある合成詞。

'gold-fish, 'blackbird, 'dragonfly, 'apple-tree, 'rosebush, 'sandstone, 'blackberry, 'quicksilver; 'Englishman, 'gentleman, 'nobleman, 'ladies'-man, 'lady's-maid; 'summertime, 'dinnertime, 'birthday, 'dogdays, 'midsummer, etc.

('midnight, but 'mid'winter or mid'winter.)

【注意】 1. これ等の語の第二成分は其意味第一成分程重要ならず、又多くの類似語中に屢使用せらるゝため殆んど單なる語尾に等しいものになつて了つて居るが故に、之等に强勢の來る筈はないのである。此種のものには

'board-school, 'day-school, etc., 'Upton, 'Newton, 'Edinburgh, 'England, 'Canterbury, 'Portsmouth, 'Lancaster, 'Oxford Street, &c.

これ等の地名は contrast の上からも自然第一要素に强勢が來る。

【注意】 2. 强勢の都合で意味の違ふものがある。

countryman 〔'kʌntri'mæn〕	同國人	countryman 〔'kʌntrimən〕	田舍者
glase case 〔'glɑ:s'keis〕	硝子製の箱	glass case 〔'glɑ:skeis〕	硝子を入れる箱

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

【注意】 3. 前强勢の場合に於て第二成分が本來の意味を明瞭に表はす程之に medium stress を附する傾向が强くなる。

比較一 { gentleman 〔'dʒentlm̩n〕, ragman 〔'rægmæn〕; } { Johnson 〔'dʒɔnsn〕, grandson 〔'grændsʌn〕, &c.

b 「動詞」+「名詞」

これは現象を表はす合成詞である。

□動詞＋目的語

'break,wat'er, 'scarecrow, 'luck-,lustre, 'makeshift, 'do,nothing, 'know,nothing, 'telltale, 'breakfast 〔'brekfəst〕, 'pickpocket, 'pastime, &c

□動詞＋主語

'rattlesnake, 'leapfrog, 'drawbridge, &c.

□其他の關係

'whirlwind, 'leap-year, 'w: sh-tub, &c.

c 「副詞」+「名詞」

'forefinger, 'by:tander, 'underlip, 'uptrain, 'outcry, 'through journey,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

d 「名詞」+「形容詞」（は一般に前强勢、殊に第二成分が participle なる時）

'godlike, 'jelly-like, 'fool,hardy, 'colour-blind, 'blood,thirsty, 'waterproof, 'heart rending

'spirit-,stirring, 'yellowish-looking, 'sunburnt, etc.

「名詞」+「名詞+ed」の場合も前强勢

'harebrained, 'humpbacked, etc.

e 「名詞又は形容詞」+「動詞」

'brow,beat, 'kiln-dry, 'blindfold, '.whitewash, etc.

f 「副詞」+「過去分詞」

'inborn, 'downcast, 'thoroughbred, 'outcast, etc.

g 「代名詞」+「代名詞」又は

「代名詞」+「副詞」

'someone, 'somebody, 'something, 'anyone, 'everybody, 'nothing, etc.; 'somewhere, 'anyhow,

'nowhere, etc.

（同様にして 'elsewhere）

h 「動詞」+「副詞」の特別なる場合

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(均勢dの【注意】を見よ)

C (後强勢) (- '-) の場合に於て附屬語に弱勢が附くことは昔からの一般原理である。初めは均勢であつても其が熟すれば偏强勢となりて前强勢となり又後强勢となることは以下擧げる事實によつて明瞭である。殊に後强勢の場合は前述の統一の强勢法によることは忘れてはならぬ。

a 「名詞又は形容詞」+「名詞」

□地　　名

Great 'Britain, New'foundland, New'castle (locally) New'zealand, South'ampton, East 'India, Tor'quay, etc.

【注意】 1. New York 〔'- '-〕(Sweet, Jones)　〔- '-〕(Jespersen)

Newfoundland 〔、- - '-〕(local.)

□title+固有名詞

Mr 'Smith, Miss 'Sweet, King 'John, Lord 'John, Dr. 'Johnson, Prince 'Arthur, St. 'Paul, &c.

【注意】 2. St. John (Saint, place) 〔sn(t)'dʒɔn〕,　(surname) 〔'sin(d)ʒ(ə)n〕,

【注意】 3. 同樣にして次の如き人名も後强勢。

Fitzclarence〔fits'klær(ə)ns〕, Macdonald〔mək'dɔn(ə)ld〕, Macduff〔mæk'dʌf〕 etc.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

【注意】 4. mankind (the human species) 〔mæn'kaind〕, (males esp. those of a household &c.) 〔'- -〕.
後者は對照の爲めの强勢である。

b 「代名詞又は副詞」+「副詞」(後者が前者の modifier なる時), (B. g と比較)。「副詞」+「前置詞」
who'ever, wher'ever, how'ever, somebody 'else, whatever 'else, nothing 'el e, etc.
※here'after, etc.

c 「名詞」+「前置詞又は and」+「名詞」
これも b と同樣第二成分が modifier になる。
bill-of-'fare, man of 'property, bill of ex'change, days of 'grace, man-of -war, mother of' pearl, people of 'rank, a cup of 'tea, point of 'view, matter of 'fact, member of 'parliament, the Isle of 'Wight, a maid of 'honour; commander-in-'chief a box on the 'ear, head over 'heels, cup and 'saucer, knife and 'fork, bread and 'butter, etc.

※'here'by, hereu'pon(Jones), 'hereby, here'by(N. E. D.), 'whereabouts(n.) 'wherea'bouts(interrogation) (Jones)

【注意】 1. 'now and 'then, 'to and 'fro, 'more and 'more;

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

'sooner or 'later (この時 or が弱き時は前强勢 an 'hour or so), etc.

【注意】 2. 第二成分の「名詞」の前に「形容詞」ある時は强勢は其「形容詞」に落ちる。

cat-o'-'nine-tails, Jack-of-'all-trades; a cat and 'dog life.

【注意】 3. 'father-in-law, etc.

d　第二成分が compound なるか又は第一成分より長き時。

arch 'bishopric ('arch 'bishop), north 'western('north 'west), Ash 'Wednesd y,

good—'humouredly ('good 'humour), out'rageous('outrage), pocket-'handkerchief;

かくの如くして

port'folio, port'manteau, etc.

【注意】 三成分の合成語では初めの二成分が二重强勢の合成語なる場合はその二成分は共に强勢をとるか或は第二成分のみ强勢をとる。

hot-water-bottle 〔- '- - - -, '- '- - -〕

しかし合成語の accent が第一成分にあらば全體の accent も第一成分にある。

'lodging-housekeeper.

e　「副詞」+「動詞」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

A. d. の注意を見よ。

f　間　投　詞

A'ha! Good 'morning!

【注意】 1. good-morning

〔gud'mɔ:niŋ〕(on meeting),　〔'gud'mɔ:niŋ〕, 〔on parting).

【注意】 2. London Bridge,　Blackheath,

等の均勢合成詞又は OxfordStreet 等の前強勢合成詞が間投詞として用ひられる時は強勢は其儘である。

D　(リズム上からの變化)

均勢が前強又は後強勢へ

'ten 'years……'ten years 'old,

'Chi'nese……a 'Chinese 'mandarin,

'Ber'lin ……'Berlin 'wool, a 'Japanese fan,

'Waterloo 'Station, 'twenty-five 'members, 'goodlooking 'man, 'outside 'passenger, 'well -known 'voice, 'afternoon 'tea, 'grown-up 'daughter; 'short-sighted 'man, 'down hill 'rush, 'five-and-twenty 'blackbird, etc.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

'Chi'nese……speak Chi'nese,

'down'hill ……He rushed down'hill,

'fif'teen ……just fif'teen, &c.

a 'good 'thing …a 'very good 'thing, 'not very 'good,

'home-made 'jam……it's 'all home-'made;

'bad tempered 'dog……he was 'always bad 'tempered. (Ward)

【注意】1. 初めの方の例に於ては合成詞が modifier になつて居る事に注意せねばならぬ。

【注意】2. cat and 'dog の如く已に unity の上から後强勢になつて居るものは其後に名詞が來ても强勢には變化を來さぬ。尙其强勢詞は全體を引纏める中心となる所から後の名詞の强勢は自然附屬的のものとなる。

cat and 'dog ,life, cock and 'bull ,story, rag bone and 'bottle ,merchant, etc.

【注意】3. 均勢合成詞でも其內の前後の要素の關係が密接でない者は【注意】2. の場合と同じである。

a drowned 'rat ,look, the Charles 'Dickens edition, etc.

同樣にして

a good all 'round ,man, the employers' liability for 'injury ,bill, etc.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ